

中国



1 農・畜産業の概況

中国の国内総生産（GDP）に占める農林水産業の割合は、8.0%であり、就業人口に占める1次産業従事者の割合は23.6%となっている（表1）。

中国の農林水産業の総生産額は増加傾向で推移しており、20年は、前年比11.1%増の13兆7782億元となった（表2）。部門別の割合を1980年と比較すると、農業（耕種）は52.1%まで減少した一方で、畜産業は29.2%にまで増加している。

表1 農林水産業の地位

（単位：億元、万人）

区分/年	1980	1990	2000	2018	2019	2020	前年比 (増減率)
GDP	4,588	18,873	100,280	919,281	986,515	1,015,986	3.0%
農林水産業	1,372	5,062	14,944	67,559	73,577	81,104	10.2%
割合 (%)	29.9	26.8	14.9	7.3	7.5	8.0	0.5ポイント
就業人口	42,361	64,749	72,085	75,782	75,447	75,064	▲0.5%
第1次産業	29,122	38,914	22,790	19,515	18,652	17,715	▲5.0%
割合 (%)	68.7	60.1	31.6	25.8	24.7	23.6	▲1.1ポイント

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

表2 農林水産業総生産額の推移

（単位：億元）

区分/年	1980	1990	2000	2018	2019	2020	前年比 (増減率)
農林水産業	1,923	7,662	24,916	113,580	123,968	137,782	11.1%
農業(耕種)	1,454	4,954	13,874	61,453	66,067	71,748	8.6%
割合 (%)	75.6	64.7	55.7	54.1	53.3	52.1	▲1.2ポイント
畜産業	354	1,967	7,393	28,697	33,064	40,267	21.8%
割合 (%)	18.4	25.7	29.7	25.3	26.7	29.2	2.6ポイント
林業	81	330	937	5,433	5,776	5,962	3.2%
割合 (%)	4.2	4.3	3.8	4.8	4.7	4.3	▲0.3ポイント
水産業	33	411	2,713	12,132	12,572	12,776	1.6%
割合 (%)	1.7	5.4	10.9	10.7	10.1	9.3	▲0.9ポイント
その他	0	0	0	5,865	6,489	7,030	8.3%
割合 (%)	0.0	0.0	0.0	5.2	5.2	5.1	▲0.1ポイント

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

注：総生産額は名目値。

畜産物に関し、近年の1人当たり年間消費量を見ると、豚肉以外の畜産物は都市部・農村部ともに消費量が増えている（表3）。豚肉の消費量が減少した要因として、2018年8月に中国で初めて発生したアフリカ豚熱の影響による供給量の減少から価格が上昇したことで、他の畜産物へ消費需要が移行したことなどが影響していると考えられる。また、品目別に見ると、豚肉を除く全ての品目で都市部の消費量が農村部の消費量を大きく上回っている。豚肉については、中国の伝統的な食材であるため都市部と農村部との消費量にあまり差はないが、その他の品目については、都市部を中心とした所得向上に伴う外食産業の普及などにより、畜産物の消費が農村部よりも促進されているためと考えられる。

表3 畜産物の1人当たり年間消費量

（単位：kg/人）

区分/年	2016	2017	2018	2019	2020	前年比 (増減率)	
都市部	牛乳乳製品	16.5	16.5	16.5	16.7	17.3	3.6%
	牛肉	2.5	2.6	2.7	2.9	3.1	6.9%
	豚肉	20.4	20.6	22.7	20.3	19.0	▲6.4%
	家きん肉	10.2	9.7	9.8	11.4	13.0	14.0%
農村部	牛乳乳製品	6.6	6.9	6.9	7.3	7.4	1.4%
	牛肉	0.9	0.9	1.1	1.2	1.3	8.3%
	豚肉	18.7	19.5	23.0	20.2	17.1	▲15.3%
	家きん肉	7.9	7.9	8.0	10.0	12.4	24.0%

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

注：家庭での消費量であり、外食や加工品による消費は含まれない。

2 畜産の動向

(1) 養豚・豚肉産業

豚肉は伝統的な食材であり、中国の食肉生産量の約3分の2を占めている。米国農務省によると、2020年の中国の豚肉生産量と消費量は、それぞれ世界の約4割を占めており、ともに第2位のEUを大きく上回っている。

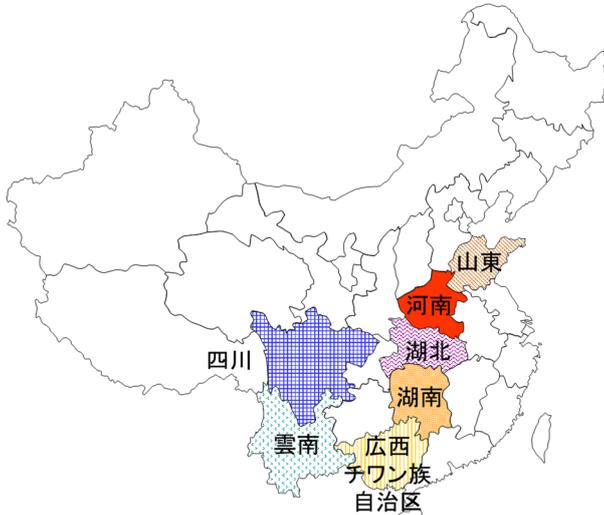
① 養豚の飼養動向

地域別の豚飼養頭数を見ると、山東省以南に多く、また、上位7省(自治区)で全体の5割以上を占めるなど、地域的に偏りが見られる(図1、2)。

飼養頭数は2012年以降、減少傾向で推移していたところ、19年には前年に発生したアフリカ豚熱の影響で3億1041万頭にまで減少したが、2020年末には4億650万頭と急速に回復したとされる(図3)。

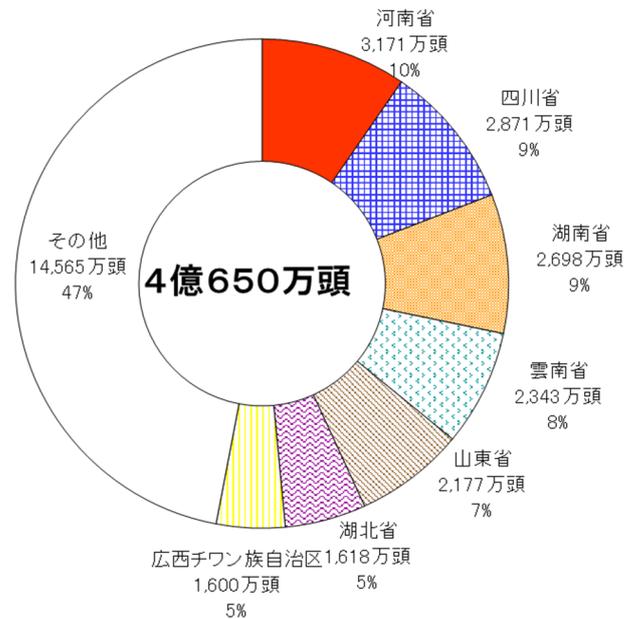
飼養農家の規模は、零細が極めて多く、年間出荷頭数が49頭以下の農場が全体の93.8%を占めている(表4)。

図1 豚飼養頭数上位7省・自治区(2020年)



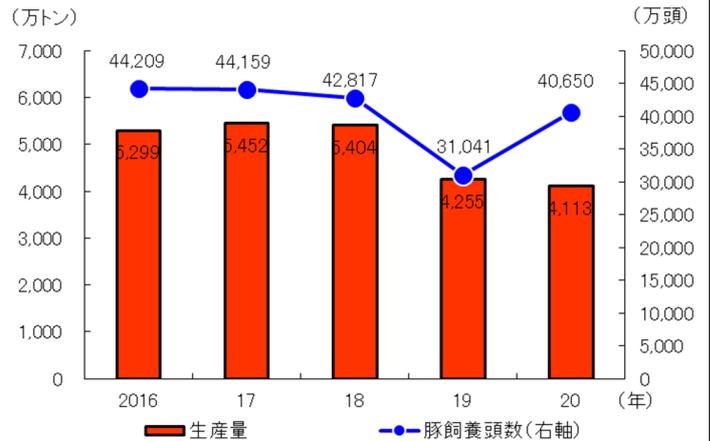
資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

図2 省・自治区別豚飼養頭数(2020年)



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

図3 豚の飼養頭数と豚肉生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

表4 豚の出荷規模別の農場戸数 (2019年)

(単位：万戸)

区分/規模	全体	1~49頭	50~99頭	100~499頭	500~999頭	1,000~2,999頭	3,000~4,999頭	5,000~9,999頭	10,000~49,999頭	50,000頭以上
戸数	2,078	1,949	71	41.6	9.2	4.7	1.18	0.65	0.37	0.06
割合	100.0%	93.8%	3.4%	2.0%	0.4%	0.2%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%

資料：中国農業部「中国畜牧獸医年鑑」

② 豚肉の需給動向

豚肉の生産量は、2014年をピークに減少傾向で推移しており、19年は、前年に発生したアフリカ豚熱の影響が本格化したため生産量が大幅に減少した。2020年はアフリカ豚熱の影響下からの回復への転換期にあり、生産量は前年をやや下回った。

消費量は、人口増加や所得向上を背景に増加傾向で推移してきたが、15年以降は横ばいとなっている。19年はアフリカ豚熱の影響による豚肉価格の上昇などから他畜種へ消費需要が移行したことから大幅に減少したとみられ、生産基盤が回復途上にある2020年においても同様に前年を下回った。(表5)。

20年の輸入量は、飼養頭数は回復したものの、豚肉生産の復調に時差が生じることから、前年に引き続きアフリカ豚熱による国内生産量の減少から急増しており、前年比115%増の528万トンとなった。

表5 豚肉需給の推移

(単位:万トン)

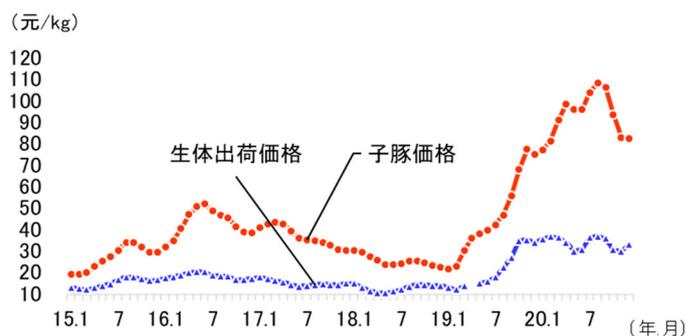
区分/年	2016	2017	2018	2019	2020
生産量	5,426	5,452	5,404	4,255	4,113
輸入量	218	162	146	245	528
輸出量	19	21	20	14	10
消費量	5,609	5,581	5,530	4,487	4,152

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生産量）、
USDA/FAS「PSD Online」（輸出入量、消費量）
注：枝肉重量ベース。

③ 豚肉の価格動向

2018年に発生したアフリカ豚熱の影響から飼養頭数、生産量が減少したため、19年に入り生体出荷価格、子豚価格は共に急騰した。19年半ばにアフリカ豚熱の感染リスクが低減したとの判断が大勢を占めたことで、増頭機運の高まりから子豚需要が急増し、子豚価格を牽引した。総飼養頭数は19年末から回復傾向を示していたものの、豚肉生産量の回復までには時差があるため、20年の豚肉価格は引き続き高値で推移した(図4)。

図4 子豚価格、生体出荷価格の推移



資料：中国農業農村部（子豚価格）、中国国家発展改革委員会（生体豚出荷価格）

④ その他

2018年8月に発生したアフリカ豚熱は全土に拡大し、養豚業に大きな損害をもたらしたが、19年8月から実施された増頭対策の効果もあり、20年は急速に生産規模の回復を見せた。20年当初から影響が大きくなったCOVID-19の影響は主に物流規制による地域間の流通や食肉処理場の稼働停止などのサプライチェーンに影響を与えたものの、生産規模の回復に対する影響は限定的とされた。



写真1 山東省済南市内の市場での豚肉販売風景



写真2 北京市内のスーパーでの豚肉販売風景

（2）酪農・乳業

牛乳・乳製品の消費量は、人口増加や所得向上、健康志向の高まりなどを背景に増加傾向にある。2008年に発覚したメラミン混入事件は、国産の育児用調製粉乳などに対する消費者の不信感から輸入需要の拡大につながったが、その後の政府や乳業による信頼回復への取り組みなどから、近年は、国産需要が高まりつつある。

国連食糧農業機関（FAO）のデータによると、2020年の中国の生乳生産量（水牛を除く）は、前年から順位を1つ上げた世界第4位であり、全世界の4.9%を占める。

① 乳用牛および生乳の生産動向

地域別の飼養頭数を見ると、冷涼な中国北部で多く、上位6省・自治区で全体の約6割の頭数を占めている（図5、6）。飼養頭数は国内需要を背景に2008年ごろまで急速に増加したが、それ以降は横ばいで推移しており、20年は、前年並みの1043万頭であった（図7）。

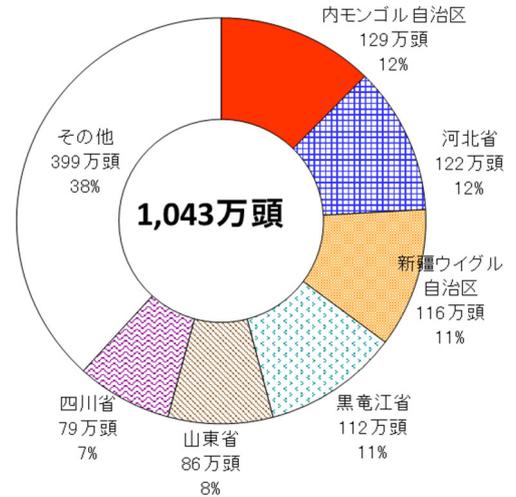
また、飼養農場の規模は、飼養頭数49頭以下の農場が全体の97.5%を占めている（表6）。

図5 乳牛飼養頭数上位6省・自治区（2020年）



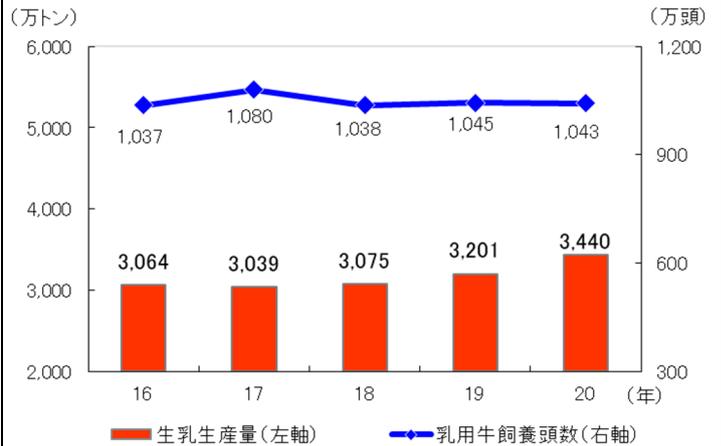
資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図6 省・自治区別乳用牛飼養割合（2020年）



資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図7 乳用牛飼養頭数と生乳生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生乳生産量）、中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」（飼養頭数）

表6 乳用牛の飼養規模別農場戸数（2020年）

区分／規模	(単位:千戸)								
	全体	1～49頭	50～99頭	100～199頭	200～499頭	500～999頭	1000～1999頭	2000～4999頭	5,000頭以上
戸数	512.1	499.4	6.1	2.2	1.7	1.3	0.8	0.4	0.2
割合	100.0%	97.5%	1.2%	0.4%	0.3%	0.2%	0.1%	0.1%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

② 牛乳・乳製品の需給動向

生乳の生産量は増加傾向で推移するものの、乳製品需要の高まりから、製品原料などに利用される全粉乳や脱脂粉乳、また、直接消費としての飲用乳などの輸入量は、いずれも増加傾向で推移している（表7）。これら乳製品の輸入量は、中国の乳製品需要の高まりに合わせ、引き続き増加基調で推移するとみられる。なお、2020年はホエイが顕著に増加しているが（前年比38.0%増）、主な用途である豚の飼料の需要量がアフリカ豚熱の影響で増減した影響を受けたものと考えられる（19年：アフリカ豚熱発生により豚飼養頭数減少、20年：飼養頭数は急速に回復）。

表7 乳製品輸入量の推移

(単位: 万トン)

区分/年	2016	2017	2018	2019	2020
全粉乳	42	47	52	67	64
ホエイ	49	53	55	45	62
飲用乳	63	67	67	89	104
脱脂粉乳	18	25	28	34	34
育児用調製粉乳	23	30	33	36	35
チーズ	9.7	10.8	11	12	13
バター	8.7	9.8	12.0	9	12.3
ヨーグルト	1.5	2.8	2.7	3.2	2.8

資料：USDA/FAS「PSD Online」（全粉乳、飲用乳、脱脂粉乳、チーズ、バター）、「Global Trade Atlas」（ホエイ、育児用調製粉乳、クリーム、ヨーグルト）

注：HSコードは、ホエイは040410、育児用調製粉乳は190110、ヨーグルトは040310。

乳製品のうち、多用途で用いられる全粉乳（育児用調製粉乳や還元乳のほか、ヨーグルト、アイスクリーム、焼き菓子などの原料として使われる）の需給を見ると、20年の消費量は、前年比8.0%減の159万トンとなった（表8）。一方、輸入量は、13～14年にかけての大量輸入で在庫が積み上がったことから15年以降は減少していたが、その後の需給ギャップの解消から20年の輸入量は64万トンとなった。

主な輸入先はニュージーランドであり、同国はFTAによる関税削減の恩恵を受けて^(注)全粉乳輸入量の9割を占めている。

注：枠内無税（2020年）。枠外の最恵国税率は10%。

詳細は『畜産の情報』2016年9月号 「中国の牛乳・乳製品をめぐる動向～産業構造の変化と今後の国際需給への影響～」

(<https://lin.alic.go.jp/alic/month/domefore/2016/sep/wrepo02.htm>) を参照。

表8 全粉乳需給の推移

(単位: 万トン)

区分/年	2016	2017	2018	2019	2020
生産量	138	108	97	105	99
輸入量	42	47	52	67	64
輸出量	0.3	0.2	0.2	0.1	0.1
消費量	199	160	153	172	159

資料：USDA/FAS「PSD Online」

また、脱脂粉乳は、全粉乳に比べて消費量が少ないものの、近年は増加傾向にあり、輸入も伸びている（表9）。また、国内生産よりも輸入量が多いことが特徴的である。

表9 脱脂粉乳需給の推移

(単位: 万トン)

区分/年	2016	2017	2018	2019	2020
生産量	4.0	3.0	2.0	1.5	2.0
輸入量	18	25	28	34	34
輸出量	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
消費量	22	28	30	36	36

資料：USDA/FAS「PSD Online」

飲用乳の消費量は、2015年をピークに減少していたが、19年以降は増加に転じ、20年は、前年比7.9%増の3652万トンとなった（表10）。

表10 飲用乳需給の推移

(単位: 万トン)

区分/年	2016	2017	2018	2019	2020
生産量	3,224	3,189	3,225	3,298	3,550
輸入量	63	67	67	89	104
輸出量	2.3	2.3	2.7	2.5	2.5
消費量	3,285	3,253	3,290	3,384	3,652

資料：USDA/FAS「PSD Online」

英国の市場調査会社であるユーロモニターインターナショナル社によると、小売販売数量は、フレーバーミルクとヨーグルトが減少しているのに対し、牛乳とチーズは増加しており、中でも、チーズの増加が著しい（表11）。牛乳については、地方を中心にコールドチェーンが未成熟なことから、ロングライフ（LL）牛乳が広く普及（牛乳販売量の8割程度。表11）しているが、近年では都市部を中心にコールドチェーンが整備され、価格の高い冷蔵牛乳も流通しつつある。ヨーグルトについては、常温の飲むタイプのヨーグルトを中心に普及している。また、チーズは、プロセスチーズが販売量の8割強を占め、ピザ

やハンバーガーなど外食需要を中心に消費が広がってきたが、近年では子供用のスティックチーズなどを中心に、家庭での消費も増加しつつある。

また、一部のLL牛乳や飲むヨーグルトは、ビニールパックに入った製品も販売されている（写真4）。

表 1 1 主な牛乳乳製品の小売販売数量の推移

（単位：万トン、千万リットル）

区分／年	2016	2017	2018	2019	2020
牛乳	894	885	885	900	943
うちLL	765	749	741	747	784
うち冷蔵	129	136	144	153	158
プレーンミルク	784	700	648	614	565
ヨーグルト(液体)	602	681	750	820	805
ヨーグルト(それ以外)	161	174	180	183	173
チーズ	3.1	3.5	3.9	4.8	6.7

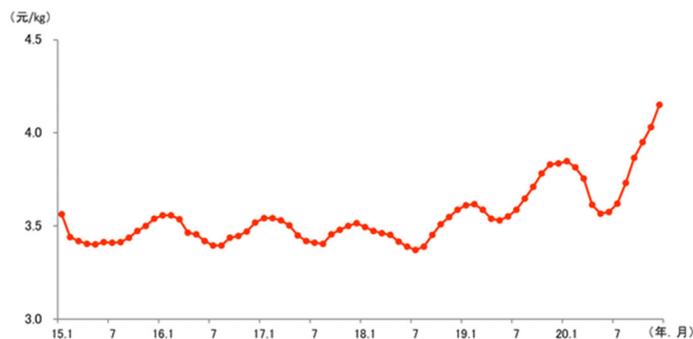
資料：ユーロモニターインターナショナル社

注：ヨーグルト（液体）はリットル、それ以外はトン。

③ 生乳価格動向

生乳価格は、2013年夏の記録的な猛暑で生産が減少したことで、同年後半から上昇したがその後下落し、15年以降は安定して推移していたが、19年以降は、堅調な需要に後押しされ、季節的な変動はあるものの上昇傾向にある（図8）。

図8 生乳の農場出荷価格の推移



資料：中国農業農村部

注：主要生産省・自治区（河北、山西、内モンゴル、遼寧、黒竜江、山東、河南、陝西、寧夏、新疆）における農場出荷価格の平均。これら10省・自治区で生乳生産の8割を占める。

④ 販売風景

冷蔵牛乳の販売風景は日本と同様であるが、常温保存が可能なLL牛乳は、飲みきりサイズのを10～20個程度（写真は190ml×15個入り）まとめて厚紙で包装し、目立つ印刷を施して売られている点が特徴的である（写真3）。



写真3 LL牛乳（北京市内）



写真4 飲むヨーグルト（北京市内）

(3) 肉牛・牛肉産業

① 飼養動向

中国で、商業的な肉用牛の生産が始まったのは1990年代と言われており、それまで牛は、主に役畜として飼われていた。肉用牛として飼育されているのは主に、黄牛（在来種）とシンメンタール種の交雑種である。最近では、品種改良の観点などから、海外からのアンガス種などの生体牛輸入も増えている。

飼養頭数を地域別に見ると、役畜として利用されてきた内陸部での飼養頭数が多く、飼養頭数が400万頭以上の上位9省・自治区で全体の6割を占めるなど偏在している（図9、10）。また、飼養農家は零細が極めて多いのも同様で、年間出荷頭数が9頭以下の農場が全体の93.5%を占めている（表12）。

飼養頭数と牛肉生産量の推移を見ると、共に増加傾向で推移しており、2020年の飼養頭数は7685万頭、牛肉生産量は672万トンとなった（図11）。米国農務省によると、20年の中国の牛肉生産量は、米国、ブラジルに次ぐ世界第3位（米国の5割強）であり、全世

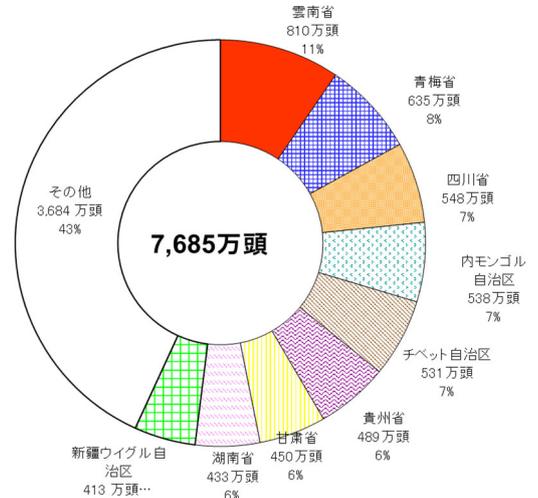
図9 肉用牛飼養頭数上位9省・自治区（2020年）



資料：中国農業農村部「中国畜牧兽医年鉴」

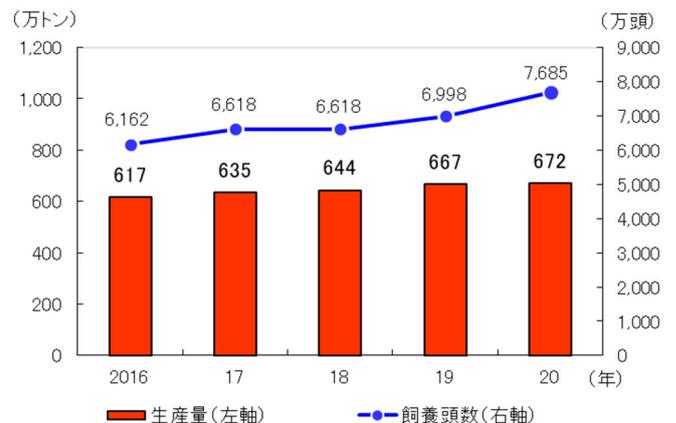
界の生産量の約1割を占めている。なお、中国の牛肉は、イスラム教徒による消費が多く、ハラールの牛肉が多く売られているのも特徴とされる。

図10 省・自治区別肉用牛飼養割合（2020年）



資料：中国農業農村部「中国畜牧兽医年鉴」

図11 肉用牛飼養頭数と牛肉生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生産量）、中国農業農村部「中国畜牧兽医年鉴」（飼養頭数）

注：2016年の飼養頭数は中国国家统计局の統計値からALICで推計。

表12 肉用牛の出荷規模別の農場戸数（2020年）

区分／規模	（単位：万戸）						
	全体	1～9頭	10～49頭	50～99頭	100～499頭	500～999頭	1,000頭以上
戸数	757.0	707.5	40.6	6.6	2.1	0.2	0.1
割合	100.0%	93.5%	5.4%	0.9%	0.3%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧兽医年鉴」

② 需給動向

牛肉消費量は長期にわたって増加し続けており、2020年は949万トンとなった（表13）。一方、国内生産は増加しているものの、拡大する需給ギャップを埋めるべく、輸入量も急増している。同年の主な輸入相手先国はブラジル（シェア：4割）、アルゼンチン（同2割強）、豪州（同1割弱）、ウルグアイ（同1割弱）となった。なお、現地専門家の中には、別途、統計に表れない相当量の非正規輸入品が国内で流通しているとの見方があるが、詳細は不明である。

表13 牛肉需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2016	2017	2018	2019	2020
生産量	617	635	644	667	672
輸入量	76	90	137	218	278
輸出量	2.7	2.1	2.1	2.1	1.6
消費量	687	724	781	883	949

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生産量）、
USDA/FAS「PSD Online」（輸出入量、消費量）

注：枝肉重量ベース。

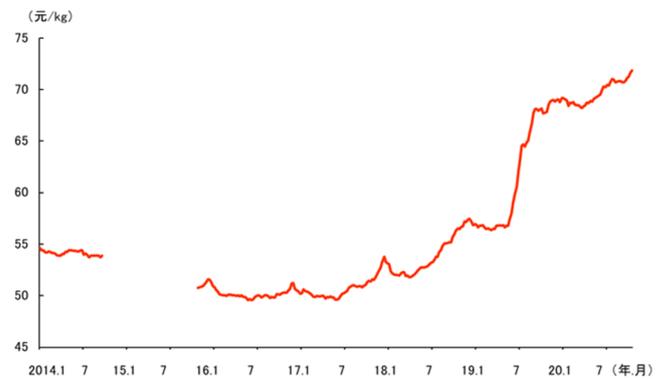


写真5 スーパーでの冷蔵牛肉販売風景（北京市内）

③ 価格動向

牛肉の卸売価格は、需要の拡大に伴い2014年に高水準となったが、15年後半以降は輸入量の増加から下降基調で推移していた。一転して18年以降は、中国国内でのアフリカ豚熱発生の影響による豚肉価格の上昇に伴う代替需要や外食需要の高まりなどから上昇傾向で推移している（図12）。

図12 牛肉卸売価格の推移



資料：中国商務部

注：2015年のデータは公表されていない。



写真6 スーパーでの冷凍牛肉販売風景（北京市内）。
「清真」（ハラール）マークがついている商品も多い。

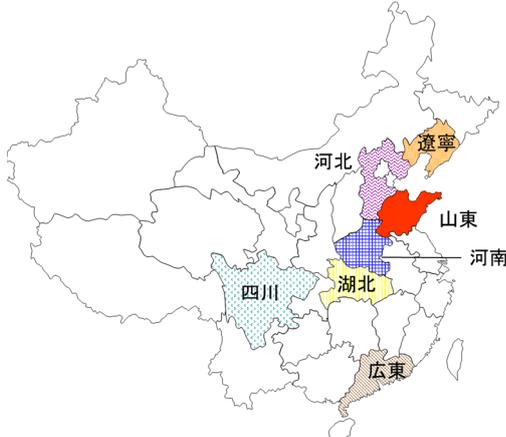
（４）肉用鶏・鶏肉産業

① 飼養動向

鶏肉は、豚肉に次いで多く消費される食肉である。肉用鶏の品種は、約半数が白羽肉鶏と呼ばれる海外品種で、残りは黄羽肉鶏と呼ばれる在来品種などである。近年では小型の白羽肉鶏の育種が進められ、独自品種の開発が行われている。

地域別の飼養羽数を見ると、沿岸部から内陸部での飼養が多く、上位7省で全体の5割強を占めている(図13、14)。家きんの飼養羽数は、国内での鳥インフルエンザ発生により13年に一時的に減少し、その後は増加基調で推移した。18年に発生したアフリカ豚熱の影響により養豚産業が大きな被害を受けたことから、鶏肉の代替需要が大きくなり、19年以降は増加基調にある。(図15)。なお、飼養農場は零細が極めて多く、年間出荷羽数が2000羽に満たない経営が98.6%とかなりの割合を占めている(表14)。

図13 家きん飼養羽数上位7省

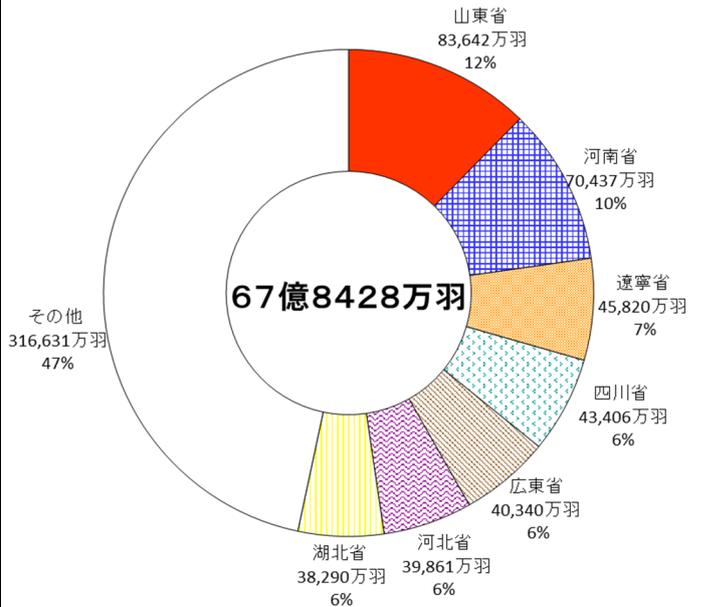


資料：中国農業部 「中国農業年鑑」

20年の家きん肉の生産量は、1460万トンであった(図15)。米国農務省によると、中国の鶏肉生産量は米国に次いで世界第2位で、世界の生産量の14.7%を占めている。

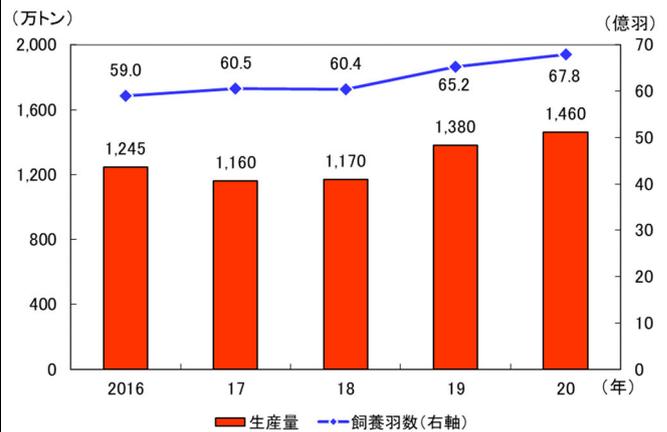
(注)「家きん」はブロイラー(肉用鶏)や採卵鶏、アヒルなど。

図14 省・自治区別家きん飼養羽数(2020年)



資料：中国農業農村部「中国農業年鑑」

図15 家きん飼養羽数と家きん肉生産量の推移



資料：USDA/FAS「PSD Online」(生産量)、中国農業部「中国農業年鑑」(飼養羽数)

表14 家きん(肉用)の出荷規模別の農場戸数(2020年)

(単位: 万戸)

区分/規模	全体	1~1,999羽	2,000~9,999羽	1万~29,999羽	3万~49,999羽	5万~99,999羽	10万~499,999羽	50万~999,999羽	100万羽以上
戸数	1,834.7	1,809.1	14.1	5.5	2.9	1.9	1.0	0.1	0.1
割合	100.0%	98.6%	0.8%	0.3%	0.2%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

鶏肉の輸入は、アフリカ豚熱の影響により19年に引き続き増加した。養豚産業の規模縮小に伴う代替需要により、鶏肉生産の拡大だけでは間に合わず、鶏肉輸入の拡大ももたらされた。

一方、輸出は、鶏肉調製品が中心となり、主な輸出相手先国は日本（約7割）となっている。20年はCOVID-19の影響により業務用需要が低迷したため、前年を下回る数量に落ち込んでいる（表15）。

また鶏肉価格を見ると、16年12月以降、国内でヒトへの鳥インフルエンザ（H7N9型）の感染が多数報告されたことから、政府は生体家きん市場を相次いで閉鎖した。これを受けて、生体で販売できなくなった鶏は丸どりとして小売店に供給されたため、17年は供給過剰による鶏肉価格の下落が生じたものの、同年後半以降は16年を上回る水準まで回復した（図16）。その後、アフリカ豚熱の流行による豚肉生産量減少のため、鶏肉需要が拡大した影響で、19年の卸売価格は高騰している。19年末から20年にかけて、鶏肉の供給体制がある程度整ったことで、鶏肉価格は下落に向かった。さらにCOVID-19による需要の減少も一因となっている。20年後半になると、外食需要が多少の回復を見せ

たことから、鶏肉価格はやや上昇した。

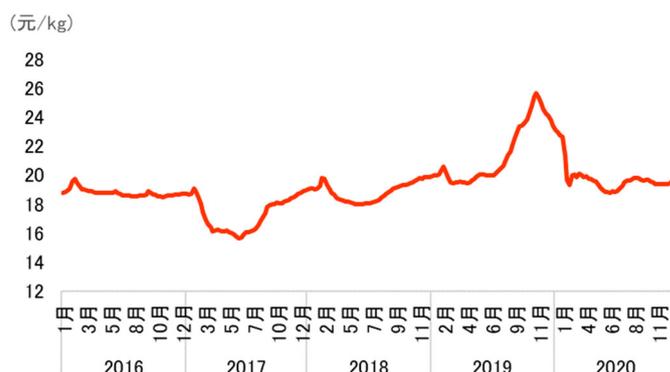
表15 鶏肉需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2015	2016	2017	2018	2019	2020
生産量	1,356	1,245	1,160	1,170	1,380	1,460
輸入量	26.8	43	31.1	34.2	58	99.9
輸出量	40.1	38.6	43.6	44.7	42.8	38.8
消費量	1,343	1,249	1,148	1,160	1,395	1,521

資料：USDA/FAS「PSD Online」

図16 鶏肉（丸どり）の卸売価格の推移



資料：中国農業部「中国農業発展報告」



写真7 市場での丸どり販売風景（山東省済南市内）



写真8 市場での生鳥販売風景（山東省済南市内）

（5）飼料穀物

中国は、トウモロコシを重要作物の一つと位置付け、需給の安定を図るための穀物備蓄政策を実施してきた。しかし、最低買付価格を保証する同政策や、トウモロコシの国内生産量は、16/17年度以降、一時的に減少したが、20/21年度は国内価格の上昇などを背景に前年並みを維持した。また、消費量は、飼

料向けやでん粉原料などの工業向け需要の拡大により増加基調で推移している。この結果、同年度の輸入量は大きく増加した（表16）。生産量を地域別に見ると、東北3省（黒竜江、吉林、内モンゴル自治区）で全体の3分の1、さらに上位10省で約8割を占めている（図17、写真9）。

表 16 トウモロコシ需給の推移

(単位:万トン)

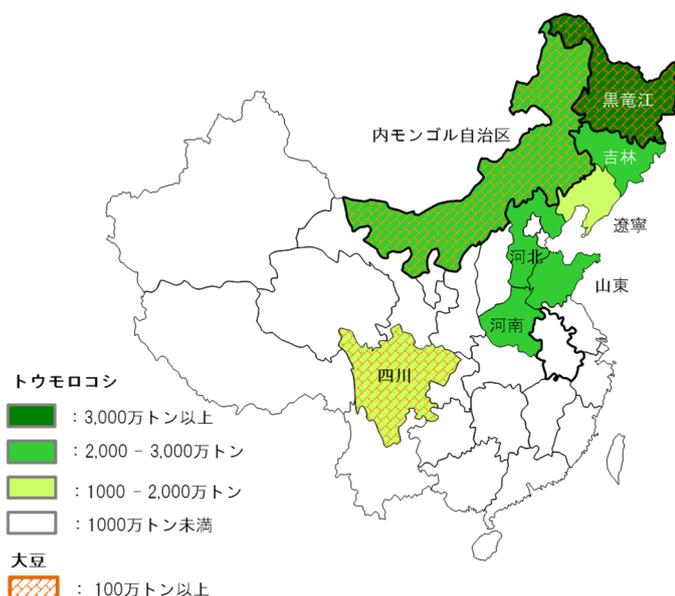
年度	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21
作付面積(万ha)	4,418	4,234	4,213	4,128	4,126
総供給量	47,809	48,556	48,420	47,854	49,071
国内生産量	26,361	25,907	25,717	26,078	26,067
期首在庫	21,202	22,303	22,254	21,018	20,053
輸入量	246	346	448	758	2,951
総需要量	25,508	26,302	27,402	27,801	28,500
国内消費量	25,500	26,300	27,400	27,800	28,500
飼料向け	18,500	18,700	19,100	19,300	20,300
食用・工業向けなど	7,000	7,600	8,300	8,500	8,200
輸出量	8	2	2	1	0
期末在庫	22,302	22,254	21,018	20,053	20,570

資料:USDA/FAS「PSD Online」

注1:生産年度は10月～翌9月。

注2:総需要量=国内消費量+輸出量。

図 17 トウモロコシおよび大豆の生産分布 (2020年)



資料:中国国家统计局



写真9 中国のトウモロコシ畑 (吉林省)

一方、大豆については、食用油原料としての利用のみならず、搾油後の大豆かすが家畜飼料の原料として使われていることから、これら需要の伸びもある中で大量に輸入されている。20/21年度の生産量1960万トンに対し、輸入量は9976万トンとなった(表17)。

このため、近年の中国のトウモロコシや大豆の輸入動向が、世界の穀物相場を大きく左右させる要因となっている。

表 17 大豆需給の推移

(単位:万トン)

年度	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21
作付面積(万ha)	760	825	841	933	988
総供給量	12,373	12,950	12,157	13,503	14,397
国内生産量	1,360	1,528	1,597	1,809	1,960
期首在庫	1,664	2,012	2,306	1,840	2,461
輸入量	9,350	9,410	8,254	9,853	9,976
総需要量	10,361	10,643	10,212	11,042	11,281
国内消費量	10,350	10,630	10,200	11,033	11,274
飼料向け	360	390	410	473	504
工業向け	8,800	9,000	8,500	9,150	9,300
食用向け	1,190	1,240	1,290	1,410	1,470
輸出量	11	13	12	9	7
期末在庫	2,012	2,306	1,946	2,461	3,116

資料:USDA/FAS「PSD Online」

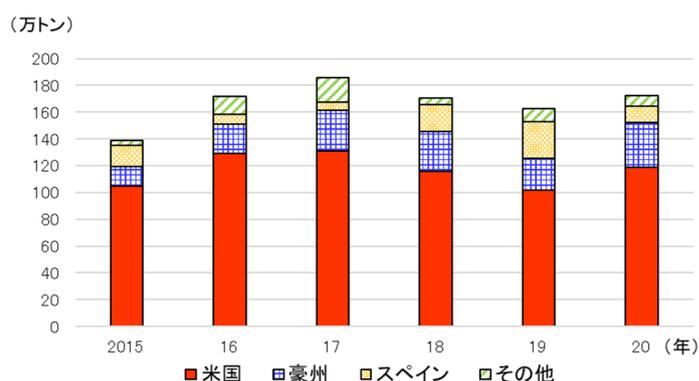
注1:生産年度は10月～翌9月。

注2:総需要量=国内消費量+輸出量。

注3:搾油向けは「工業向け」に含まれる。

また、生乳生産の拡大を進める中で、乳牛の飼料として、乳量増加や乳質向上の効果の高いアルファルファなどの飼料用乾草の輸入量も増加基調にある(図18)。これら輸入されるアルファルファなどのほとんどは乾草であり、ミールやペレット状のものは少ない(写真10)。近年では米国からの輸入が過半を占めるなか、豪州やスペインからの輸入が続く状況となっている。

図 18 アルファルファなどの輸入量の推移



資料:「Global Trade Atlas」

注:HSコードは1214。

写真10 輸入アルファルファ (天津市)

